

自主避難者の心の「揺れ」

——福島原発事故がもたらす不可視の被害と不可視化される被害者——

立教大学大学院 廣本由香

1. 背景・目的

福島原発事故から3年半が経ったが、いまだ各地に自主避難を続ける家族がいる。自主避難は強制避難とは違い、主体的に避難をして、避難を終えることができる(山下・開沼編 2012)。もちろん行政や支援団体の支援の打ち切りで避難を終えざるをえないこともあるだろう。だが、基本的に自主避難者の避難生活とは、自らの判断で避難をして、その後も避難を継続するか終了するかを決めなくてはならないものである。

本報告で取り上げる佐賀県鳥栖市の自主避難者の場合は、避難を決断したときや、県による住宅支援の延長のとき、夏休みや年末の帰省シーズン、子どもの学年が変わる年度末などに、避難を続けるのか、もしくは避難を終えて元の居住地に戻るかの選択をした。それはむしろ、選択を迫られたというのが適切かもしれない。「避難を続ける／避難を終える」という二者択一の迷いや躊躇い、葛藤が混在した平衡がとりようのない心の動きをここでは「揺れ」と捉えよう。「揺れ」は、避難者の心の動きを曖昧なまま捉える言葉である。「揺れ」に焦点をあてることで、福島原発事故がもたらした自主避難の不可視の被害が照射される。

他方で、自主避難者に限ったことではないが、このような不可視の被害は「語りがたさ」を生む。「自主的な」避難者という立場性に加え、他者から理解を得にくい被害だからである。こうして自主避難者は被害について語ることを避けるようになる。本報告では、不可視の被害と不可視化される被害者の存在を「被害の枠組み」のなかにどのように位置づけるのかを検討する。

2. 方法

2012年から佐賀県鳥栖市の自主避難者へ聞き取り調査と参与観察を行っている。また、一部の自主避難者と聞き書き集『とすのつむぎ』(関・廣本編 2013a)と写真集『とすのうた』(関・廣本編 2013b)を作成した。本報告では、とくに聞き書き集と写真集の作成経緯や編集過程でのやりとり(メールや電話を含む)のなかで得られたデータを用いる。

3. 結果・結論

福島原発事故の広範囲にわたる複合的な被害は、賠償制度のなかで評価される被害や数値化・図式化できる被害だけでなく、記述すらかなわず等閑視されている被害も多くある。このような不可視の被害も含めて原発被害の実相であると考えなければならない。「主体的」な避難であろうと、生活を奪われた苦しみ、生き方の変更を余儀なくされた悔しさ、社会関係を断ち切らなければならなかった辛さがある。避難生活における様々な局面での選択の「揺れ」は、原発事故の被害として社会的に認識される必要がある。不可視化される被害者やその不可視の被害も「被害の枠組み」のなかに組み込み、原発事故のリアリティを捉え直す実践が求められている。

参考文献

関礼子・廣本由香編, 2013a, 『とすのつむぎ』関礼子研究室。

関礼子・廣本由香編, 2013b, 『とすのうた』関礼子研究室。

山下祐介・開沼博編, 2012, 『「原発避難」論——避難の実像からセカンドタウン、故郷再生まで』明石書店。

※ 本報告は2012~14年度科学研究費基盤研究(B)「大規模複合災害における自治体・コミュニティの減災機能に関する社会学的研究」(代表・関礼子)の成果の一部である。